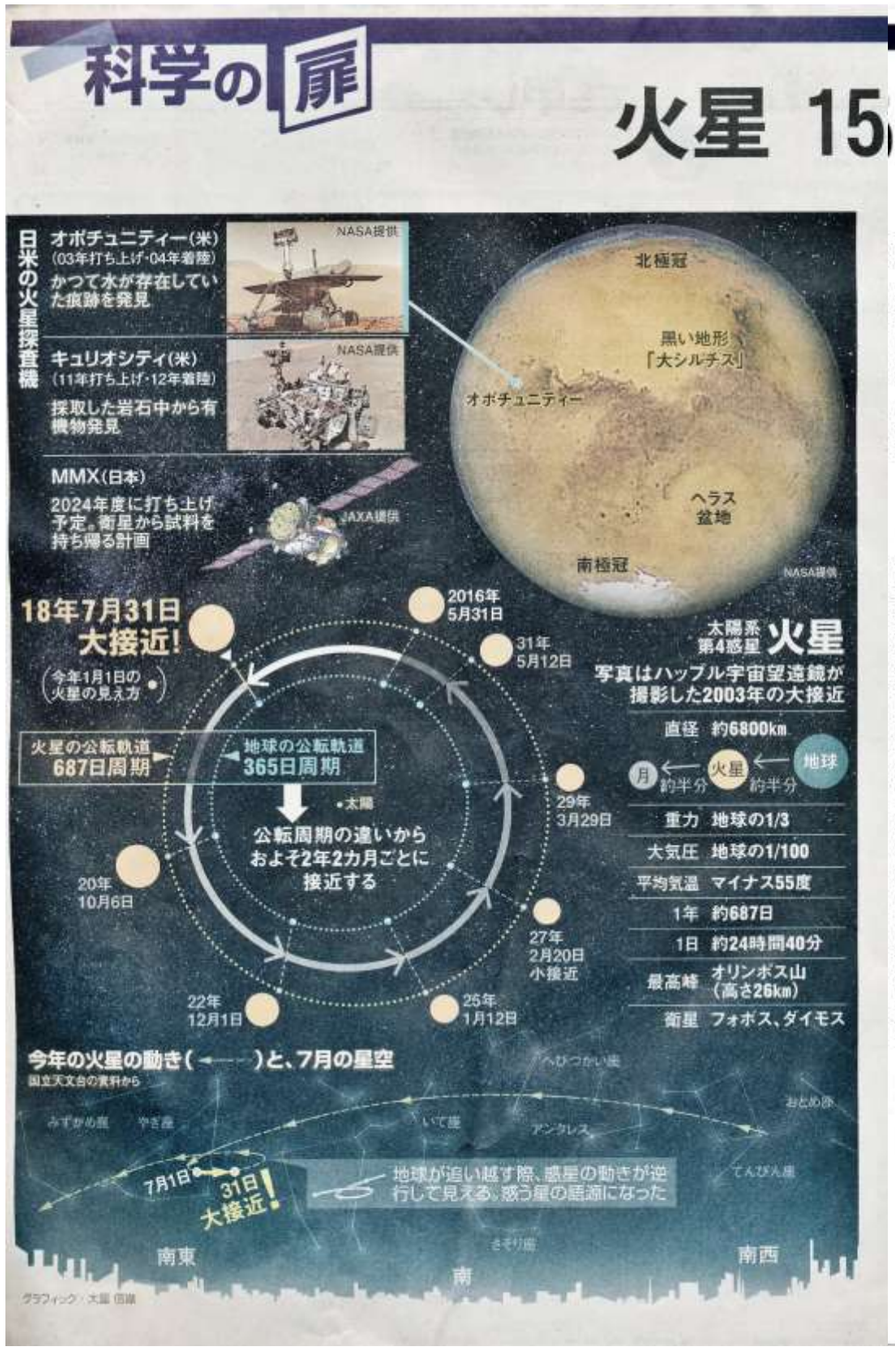
ASSETS OF OUR LIVES ≪豊かな知識に溢れ、優しい感受性に満ち、充実した人生を目指して≫ 2018年2月4日 第32巻 2号

夏は暑い。特に今年の夏は暑い。異常気象だと言われているが、世界中が異常気象であるのなら、「異常であることが現在の時代の普通の状態である」という発想に転換して、今後のいろいろな問題を乗り越える必要がある。君たちは異常という言葉に惑わされないで、昨年の朝倉地区の洪水や今度の西日本の洪水そして異常な高温による熱中症での死亡事件を「現実の今後も起きる問題」として受け入れなければならないのです。昼は猛烈に熱いのですが、夜はそれなりに涼しいです。と言っても大都会は夜も涼しくなりませんが（涙）。東京に住んでいたことがある館長は、大都会の夏はひどく熱く、冬は厳しいほど寒いと感じていましたが、そのことは理科の「比熱」の学習でわかるはずです。昼が熱いのなら夜を楽しみましょう。夜、外に出て「夏の星座」を観察しましょう。流れ星がよく見えますので。特に今年は「火星」が接近してきます。
※ちなみに館長は、ずっと以前から、夏の社会科見学は「星野村」や「久住高原」に夜に出かけて、涼しい中、「流れ星見学」に行くことが夢なのです。このアイデアはいかがでしょうか？



火星 15年ぶり大接近

火星が31日、地球に大接近する。火星はおよそ2年2カ月ごとに接近するが、6千万キロ弱まで近づくのは15年ぶりだ。観察しやすいのは8月で、小型の望遠鏡でも模様が見える。近年は水の痕跡など、探査機による発見も相次いでいる。

火星大接近を控えた先月16日、東京・中野にある光学メーカー「ケンコー・トキナー」本社で、望遠鏡の選び方や使い方を紹介する体験会が開かれた。親子連れら約20人が参加。光学デモンストレーターの渡辺一生さんが「火星は今回、土星と同じくらいの大きさに見える。鏡の直径が8センチクラスの望遠鏡でも模様が見えそう」と説明すると、参加者は「撮影には何が必要か」などと熱心に質問していた。

父親と来ていた小学6年の男の子(11)は「望遠鏡の使い方のコツが分かったので、火星だけじゃなく木星や土星も見てみたい」と楽しみにしていた。

火星は地球のすぐ外側の軌道を回っていて、地球はおよそ2年2カ月ごとに内側から追い越している。この時に最も近づくが、火星の軌道は地球より楕円(だえん)の度合いが強いため、接近する距離は毎回異なり、6千万キロより近づく「大接近」があったり、1億キロまでしか近づかない「小接近」があったりする。2003年の距離は5600万キロ弱で、「6万年ぶり」とも言われた超大接近だった。

この夏の火星大接近は5800万キロ弱と、03年に匹敵する近さだ。「大シルチス」という表面の黒い模様や、ドライアイスなどでできた南北の極冠の様子も望遠鏡で見やすくなる。

ただ、火星では今年5月に大規模な砂嵐が発生して、模様が広範囲で覆われる状態が続いている。砂嵐が収まるのはしばらく先になりそうだ。また、7月だとまだ火星が夜遅くにしか上がってこないこともあり、国立天文台も「観察しやすいのは8月や9月」として、観望会もその時期に予定している。

観察は8月が狙い目 小型望遠鏡で模様も

? 火星の大きさは地球と月の間くらいだが、地形は極めてダイナミックだ。最高峰のオリンポス山は高さ26キロで、太陽系で最大の山と言われる。すそ野の広がりは600キロに達する。東京―岡山間よりも長い距離だ。また、米探査機が発見したマリナー渓谷は全長5千キロ、幅100キロに及ぶ。

地球によく似た特徴もある。1日の長さはほとんど同じ約24時間40分。地軸の傾きもほぼ一緒で夏や冬がある。地球の100分の1の大気圧とはいえ大気がある。気温は平均マイナス55度だが、夏には20度を超すことがある。氷が溶けて液体の水が存在できる温度だ。

実際、1996年に打ち上げられた米探査機「マーズ・グローバル・サーベイヤー」が、地下からしみ出た水が地表を流れたように見える地形を上空から撮影した。今も地下に氷が残っているのではないかという期待が高まっている。

最近の研究では、地球で生命が生まれた40億年ほど前、火星にも大量の水があったらしいことが分かってきた。であれば、微生物やその痕跡が残っていても不思議ではない。だが、火星の海は消え失せ、赤茶けた大地が広がる荒涼とした世界になった。米航空宇宙局（NASA）のジェイムズ・グリーン博士は5月に来日した際、「火星で起きたことは地球でも起こりうる。地球の運命がどうなるのかを理解するためには、火星を調べることが近道だ」と語った。

! 火星探査はかつて米ソが覇を争ったが、近年は日欧も計画を本格化させている。

先陣を切ったのは旧ソ連だ。60年以降、探査機「マルス」シリーズを次々と打ち上げた。だが、軌道に乗せることが難しく、失敗が続いた。

初めて火星を近くから撮影したのは65年の米探査機「マリナー」4号だった。さらに、米国は76年に、「バイキング」1、2号の着陸機を軟着陸させた。初めて地表の鮮明な写真が撮られ、大気も観測した。

地表では現在、米国の探査車「オポチュニティー」と「キュリオシティ」が活動している。NASAは今年6月、キュリオシティが火星の岩石から炭素や水素を含む有機物を発見したと発表。しかし、生命がいた直接的な証拠は未発見だ。NASAは5月には火星の地中を掘って地質などを調べる着陸機「インサイト」も打ち上げた。将来的には火星の岩石を地球に持ち帰ったり、有人探査を目指す野心的な計画を立てている。

欧州宇宙機関（ESA）もロシアと協力し、火星の本格探査を始めた。16年に打ち上げた探査機は軌道投入に成功。20年には探査車を打ち上げる予定だ。

日本も探査機「のぞみ」を1998年に打ち上げたが軌道投入に失敗。リベンジを計画している。狙うのは火星本体ではなく、二つある衛星「フォボス」と「ダイモス」だ。小惑星探査機「はやぶさ」で磨いた試料採取の技術などを応用し、どちらかの衛星から石や砂を持ち帰る火星衛星探査計画（MMX）を進めている。打ち上げは2024年度の予定だ。宇宙航空研究開発機構（JAXA）の川勝康弘・プリプロジェクトチーム長は「どういう小天体に水や有機物が多く含まれ、惑星に物質を運んだのかを突き止める手がかりにしたい」と話す。

（浜田祥太郎、東山正宜）

NASAの有人探査計画

NASAは2030年代に宇宙飛行士を火星に送り込む探査を計画している。まず月の周りに宇宙ステーションを建設。そこを中継基地にして火星に向かう。ただ、片道でも1年ほどかかるため、飛行士の健康管理や被曝（ひばく）対策、事故への備えなど課題は尽きない。費用も巨額になりそうだ。

23日付「朝日新聞」から

志成館

下の記事もたまたまなのでしょうが、７月２３日の「朝日新聞」の記事です。志成館の「幸せになるための思考方法」でも何度も伝えていますように、面接試験では、たとえばそれが宗像中学の入試であっても、公立高校の推薦入試であっても、私立の専願入試であっても、大学の推薦入試であっても、そしてここにある就職試験でも、君たちが見られ、評価されているのは「君たちの人間性」なのです。面接では、君たちが活発でエネルギッシュであるか、優しそうで魅力的か、忍耐強いか、下品な人間か上品な人間であるかを優先的に見ているのです。だから面接官は、わざと君たちが嫌がるような質問をして、君たちの顔の反応を見ることで、君たちの本当の性格を一発で見抜くのです。学力や学歴、技術的な能力が合格するためのすべてではないのです。だって、面接を受ける人たちは皆、それがどのような試験であれ、それなりの能力は備えているのですから。そして当然のことながら、ここにあるような「身だしなみがきちんとしているかどうか」も見られます。その人の「人となり＝人間性」が、身だしなみでわかるからです。ここにいみじくも書いてあるように、**「わずか６～１２秒間で君たちの評価は下される」のです。**社会の現実の姿、社会の厳しさを志成館の「幸せになるための思考方法」や「ＡＳＳＥＴＳ」でしっかりと着実に身につけていってください。夏期講座のチラシの上の方に大きな字で書いていましたように「人生の戦いかた」「生きる力」を早く身につけるのです。

再度「就職や推薦入試の時の面接は能力をチェックしているのであって外見ではない」と思っている人に強く言っておきます。「一般社会ではそのような甘い考えは通用しない」のです。

教育

edu@asahi.com

日曜～水曜掲載

就活 身だしなみ、気になる？

いまの就職活動での服装の主流は、黒いリクルートスーツだ。何をどう着ればいいのか不安を抱える学生のために、大学では「プロ」が身だしなみを教える講座が広がっている。一方で、みんな同じ格好をする必要があるのか、と問題提起をする大学も出てきている。

「面接 第一印象6秒で決まる」

「第一印象は6～12秒で決まる。面接室に入って席に座るくらい。ぜひこの6秒をものにしてください」

「おしゃれと身だしなみは違う。おしゃれはいわゆる自己満足です」

6月上旬、帝京大学（東京都八王子市）であった「身だしなみ講座」には、3年の男子約70人が集まった。講師役は「洋服の青山」店長と、運営する青山商事の採用担当者。ネクタイの結び方からスーツやワイシャツの選び方まで、イラストを交えながら解説していった。

その後、男性用化粧品大手マンダムの担当者が登場。整髪料や制汗剤の使い方、スキンケアについて、学生をモデルにして手ほどきした。学生たちはテーブルにある整髪料をつけたり、鏡をのぞき込んだり。別の教室では女子学生約80人が花王からメイク講座などを受けた。

この講座は、帝京大の「インターンシップⅠ」の授業の一コマ。身だしなみを学んだ学生たちは、夏休みにそれぞれの会社で5日間以上のインターンシップ（就業体験）に参加する。キャリアサポートセンター長の田口仁さんは「外部のプロの人たちが伝える言葉には重みがある。大学としても学生を知る機会になっている」と話す。

授業を受けた医療技術学部の今井貴士さん(20)は「第一印象が重要だと知った。服装や髪形を直さないといけないと思った」。経済学部の柳和磨さん(20)は「企業によってネクタイの色を使い分けるのもありかなと。不安はあるけど頑張りたい」と話した。

「洋服の青山」は大学生や短大生向けのこうした講座を無償で年500回開いている。磯野猛・部長は「服装でリスクをとりたくない学生は多い。座で自信をつけてあげれば」と話す。

いまのリクルートスーツは黒が7割、紺が3割。ブルまでは紺やグレーだったが、バブル崩壊で暗い色が広がり、徐々に黒が主流になったという。

「脱・黒スーツ」の提案も

就職サイト大手「マイナビ」によると、3年生の夏休みに始まるインターンシップでの服装は「私服可」の企業も多い。これが年末にある大規模な就活イベントのころには過半数の学生がスーツ姿になり、3月の説明会「解禁」ではみんながスーツを着るようになるという。

マイナビの高橋誠人編集長は「私服なら私服で、何を着ればいいのか困る学生が多い」と話す。助言を求められると、肌の露出を避けることや襟付きのシャツを着た方が無難と伝えている。「企業にとっても学生にとっても、就活はスーツが楽なのだと思う。この状況が変わる気配はない」

採用する企業は、学生の「見た目」をどのくらい重視するのか。マイナビが5月、全国約3千社に対し新卒採用での学生の「見た目」を複数回答で尋ねた。1位は「協調性・チームで働く力」の62・6%、2位は「仕事への情熱・やる気」の58・2%。「身だしなみや見た目・雰囲気」は35・2%で7番目だった。

一方、国際教養大（秋田市）は2014年から、学生に対して「就活で黒いスーツを着る必要はない」と伝えている。在は約200社が大学説明会などを開いている。ほぼ全員が自由な服装で参加している。これまで、いスーツを着ないことで利益を被った学生はいない、という。

キャリア開発センターの三栗谷俊明さんは「人として求められる服装があるし、スーツを着ろと言っているわけではない」としたうえで、「多様性大切さが言われる中で、一的な服装にする必要があるのか。自分で考えることが大切だ」と話す。

（土居新

身だしなみ講座で自分の髪形をチェックする学生たち＝6月、東京都八王子市の帝京大

■企業が考える学生の「優秀さ」とは

1	協調性・チームで働く力	62.6%
2	仕事への情熱・やる気	58.2%
3	言葉で伝える力	43.2%
4	頭の回転の速さ	38.2%
4	今後の成長可能性	38.2%
6	相手をおもんぱかる力	37.8%
7	身だしなみや見た目・雰囲気	35.2%
8	高い知的好奇心・向上心	32.9%
9	新しい方法や提案を考える力	32.5%
10	課題の理由や解決策を考える力	30.6%

マイナビの今年6月の調査から。複数回答

エネルギッシュで、誰に対しても優しく、魅力的で、忍耐強く、上品で、知性的である人間になることはそんなに簡単なことではありませんし、いい年をした館長でさえまだ十分だとは言えません。ですから、大切なことは「日々これらのことを満たした人間に成長しよう」と意識して生活することであると思います。

左の記事の枠の中をしっかりと読んでみて、社会人としては何が大切かをチェックしてください。

但し、「そんな立派な人間になれるはずがない」「一般社会や会社組織の中でみんなと仲良くやっていくのは苦手である」という性格や好みがあってもそれはそれでかまいません。そんな人は自分に合った仕事や職場をいろいろと考えてください。世の中には面白い仕事がたくさんあるし、人生の過ごし方にもいろいろとありますので、深刻になる必要はありません。ただ、昔「サラリーマンは気楽な稼業ときたもんだ」という、無責任男を演じた名優の植木等の有名な「歌謡曲」があることを、教えておきます。「自営業はおもしろいけれど大変だ」という意味です。